る、何故あなたは其の意味をお尋ねなさらぬといふ、「幸に人の扶くるあり」幸ひ助け船が出た、覺束ない助け船だと思ふ意味が籠つて居る、『之明日晨を凌ぎ去つて門首に至る、乃ち首座に逢ふ』女房に入智慧せられて翌朝早々から出掛けて行つて門前で大顚座下の首座に遇つた、「瑕生ぜり」折角下げて來た御馳走がまだ大顚和尙に差上げぬ先に無くなりそうだ、「更に別に求むること勿れ」別に代りを求めやうと思つても無いぞ、『座問うて曰く、侍郎寺に入ること何ぞ太だ早き』侍郎は韓退之の官名である、大層早い御參詣ですねと輕く挨拶した樣であるが而かも脚下をチッと睨んで居るから却々油斷がならぬ、「更に何の時をか待たん」佛道修行は一刻も忽諸にすべきではない、思ひ立つたが黃道吉日で、思ひ立つた時に問答商量するが可い、「仁義道中」お互に修行仲間であるから首座も親切に脚下點檢と出掛けた、『之曰く、特に堂頭に去つて話を通ぜんとす』堂頭は一山の主をいふ、卽ち特に大顚和尙にお目に掛りたいといふ、「甚の處に向つてか堂頭を見ん」堂頭和尙等といふものが何處に居るか、見んと要すれば却つて失するぞ、「麻の如く粟に似たり」斯いふお仲間が世間には麻の如く粟の如く澤山にあるが困つたものぢやと侍郎を抑へた、『座曰く、堂頭什麼の因緣あつてか開示せらる』首座は韓退之に貴殿はどういふ因緣で大顚和尙の開示を請はれるか、早朝から相見を乞はれるには何か理由があるであらうといふ、「拶」好いことを問ふた、それでこそ「表儀たるに孤ならず」一山の摸範として首座位を飾する價値がある、『之前話を舉す』そこで韓退之は義の一場の商量に就いて物語つた、「堂頭に此の語無し、堂頭を謗ずること勿れ」堂頭和尙は其の樣なことは言はれぬ筈である、何を寐語を言うて居るのか、それよりも「何ぞ一掌を與へざる」何故首座に一掌を與へて妄想を斷破せぬのか、「座曰く、侍郎怎生か會す」首座はそれでは貴殿はそれを何と會得せられたかと一拶した、「王令稍嚴なり、行市を攙奪すること勿れ」佛法上の王令は嚴重であるから首座の樣に道に行人を擁して橫取りをしてはならぬぞと誡めた、『之曰く、晝夜一百八と、意旨如何』韓侍郎はこゝぞとばかり女房に入智慧されたまゝ其處へ擴げて見せた、胡麻の灰に財布を見せた樣なもので實に危險千萬なことである、「何ぞ周易中に向つて探得せざる」百八がどうの晝夜がどうのといふことならば易の本を見たら可からうと揶揄した、『座乃ち齒を叩くこと三下』曲座はコッコッと自分の齒を三つ叩いた、これが書夜一百八の意旨であるか或は大顚和尙の年齡であるか、暫く後段に於ける大顚の語に就いて研究しやう、「殃を招くこと勿れ」首座和尙下らぬ眞似をして災難を招かねば好いのにと暗に後段で趕ひ出されることを諷した、『之復堂頭に至つて又前話を進めて曰

く』韓退之は首座の一拶を蒙つても尚ほ會得が出來なかつたと見えて更に堂頭和尚に相見した、「主人公什麼の處にか在る、」大顚のことではない、韓退之自身の本來の面目は何處にあるか、外處見ばかりして居ては駄目ぢやぞと誡めた、『晝夜一百八と、意旨如何』愈女房の入智慧を用ひる時が來た、「胡餅に什麼の汁かあらん」あんころには汁はない、大顚の語に意旨等といふ餘計なものゝある筈はない、「參玄の牓樣」而し斯樣に問ふのが參禪學道の規則である、『顚亦齒を叩くこと三下』大顚和尚も首座と同じ樣なことをせられる、齒の音で年齡が分るといふ樣な呪術でもあるのかナ、「曹溪の波浪若し相似ば限なき平人も陸沈せられん」首座と堂頭和尚とは作略が似て居る、斯樣に曹溪門下の作略が似て居るとすると、天下の學人が皆迷却せられて終ふであらう、『之曰く、信に知る佛法の一般なることを』韓退之は堂頭の言を聞いて、して見ると佛法は何處でも同じことでありますナと云つた、まだ兩者の境界に天地の差あることが解らぬ、言ふことが同じならば力倆も同じであると思つて居るらしい、「雲月是れ同じ、溪山各異り」雲月は同しでも溪は溪、山は山で趣が異つて居るぞ、『顚曰く、什麼の道理を見てか乃ち一般といふ』大顚和尚は韓退之が佛法の一般云々といふたのを聞咎めて、どうして其の樣なことをいふのかと問うた、「放過すべからず」一般の一言は捨てゝは置れかぬ大顚和尚好い處へ一拶せられた、「人を殺すに血を見る」人を殺すには血を見るまでやらねばならぬ、思ひ切つて一刀兩斷するが可い、『之曰く、遡來門首に首座に接見す、復是の如し』韓退之は正直に申立てた、先程首座和尚に門前で遇つたら同じ樣に申されました、「豈恁麼の事あらんや」そんなことがあるものか、首座と堂頭とは大違だと風外老人が横鎗を容れた、『顚遂に首座を喚んで問うて曰く、遡來侍郎に祇對する佛法是なりや否や』遡來は先刻の意、そこで堂頭は首座を喚んで尋ねられた、お前は先刻侍郎に向つて對へたそうであるが、今いふた通りか、「果然として陣法を變じて來る」果して大顚和尚は作家の漢であるから巧に陣法を變じて首座を攻める、『座曰く、是』其の通りですと手もなく降參した、「咦」しつかりしろ、其の樣な腰の弱いことでは首座職は務まらぬ、「惜むべし轉路を缺く」こゝで轉身の作略を現せば確かに作家の漢であるのに、惜いことである、『顚便ち打つて院を趕ひ出す』大顚和尚は自分と同じ作略を以つて韓退之を勘破した首座を何故に趕ひ出したか、俱胝和尚は常に指を竪てゝ人の所問に答へられたが、座下の雛僧が之を眞似すると差し措かず其の指を斬り落して終つたといふ、恰どそれと同巧異曲で、同じ三下でも眞實其の地に至つた人の三下と未證據のもの、物眞似とは大違である、未證據のものの物眞似は却つて天下後世の學

人を邪路に導くものであるから大顛和尚は涙を揮つて馬駿を斬つたのである、「邪法扶け難し」大顛和尚も隨分手荒なことをしたものである、全く始末のならぬ毒手である、併し「侍郎侍郎、是れ一般か是れ兩般か」弦に到つて侍郎にも一般か兩般かゞ解つたであらう「槐樹を指し柳樹を罵つて評槌となす」權兵衛に向つて太郎を罵つて、貴樣は兵六ぢやといふ、規矩を離れ常識を絶した大機大用である、「雲は秦嶺に横はつて家何にか在る、雪は藍間を擁して馬前まず」韓退之が潮州流謫中の詩を引いて一則全體の總結とした。

玄樓曰、便打而趕出院、且道是什麼道理、若謂之罰扣齒同三下盍自罰、若復道非罰因什麼打而趕出院、這裏方是向上一竅、西天四七東土二三慧命相續處也、非庸流所會、大顛若非於是振腕頭力不啻埋郤他人自己先無出身分、要知作家履踐神鬼難窺直須領略這箇一機始得、諸仁者郤會麼、唯見雷霆施號令豈知星斗煥文章耳聾眼瞎〇千歲下得知己

【和訓】玄樓曰く、便ち打つて院を趕ひ出す、且らく道へ是れ什麼の通理ぞ、若し之を罰すと謂はゞ齒を扣くこと同じく三下、盍ぞ自ら罰せざる、若し復た罰するに非らずと道はゞ什麼に因てか打て院を趕ひ出す、這裏方に是れ向上の一竅、西天の四七東土の二三慧命相續の處なり、庸流の會する所に非らず、大顛若し是に於いて腕頭の力を振ふに非らずんば、啻だ他人を埋郤するのみにあらず、自己先づ出身の分無けん、作家の履踐神鬼窺ひ難きことを知らんと要せば、直に須らく這箇の一機を領略して始めて得べし、諸仁者郤て會すや、唯だ雷霆號令を施すを見て、豈知らんや星斗の文章を煥かすことを。

【評唱】『便ち打つて院を趕ひ出す、且く道へ是れ什麼の道理ぞ』本則も長いが評唱も又長い、長いけれども要領は簡單である、先づ大顛の首座を打つて趕ひ出した理由を研究する、『若し之を罰すと道はゞ齒を扣くこと同じく三下盍ぞ自ら罰せざる』齒を叩くが惡いとならば堂頭和尚自身も同罪で

はないか、『若し復罰するに非ずと道はゞ什麼に因つてか打つて院を趕ひ出す』罰するので無いとすれば院を趕ひ出したのはどういふ譯か、『這裏方に是れ向上の一竅、西天の四七、東土の二三、慧命相續の處なり』西天の四七は印度に於ける釋尊から迦磨大師に到る二十八祖、東土の二三は達磨初祖より曹溪慧能和尚までの六祖をいふ、書夜一百八の道理、大顚和尚が首座を趕出した端的は實に向上の道に進む一竅であつて、佛々祖々の智慧の命を相續する所以の道である、『庸流の會する處にあらず、大顚若し是に於いて腕頭の力を振ふに非んば啻に他人を埋却するのみにあらず、自己先づ出身の分無けん』這裏の道理は庸流凡見の會得し得る處ではない、大顚和尚茲で大いに其の眞骨頭を發揮せねば他を迷はせるのみならず自ら鬼窟裏に墮在して自由を失つて終ふであらう、『作家の履踐鬼神も窺ひ難きを知らんと要せば、直に須く這箇の一機を領略して始めて得べし』作家の漢の履踐する處の佛祖正傳の大道は鬼神も窺ふことか出來ぬ、而かもそれを會得せんとならば、這箇の一機、此の則でいへば晝夜一百八、叩齒三下、打而趕出等の端的を領得攻略すべきである、『註仁者却つて會すや、唯雷霆號令を施すを見て豈星斗の文章を煥かすを知らんや』サァ參學の諸人者、這箇の一機何と合點が行つたか、雷がゴロ〳〵鳴つて雨が車軸を流す樣に降つて居る時でも、上の方では星が明かに輝いて居ることは知るまい、大顚が首座を打つたことは見えて居つても、其處に轉身の一作略のあることは解るまい、「耳聾し眼瞎す」大機大用は何人の耳にも聞え眼にも見えて居る筈である、見えるどころか目が潰れる程明に輝いて居る、「千載の下知己を得たり」玄樓和尚よく大顚等の的意を道破せられた、嘸かし千載の下に知己を得たことを喜んで居るであらうと讃揚して結んだ。

頌曰、晝夜一百八、終而復始其意不可察、分明覩面同聲齒牙逢擯出得宜江北枳是江南橘、換地皆然也侍郎到此倍相疑對鏡怪影始知佛骨擊難摧將謂他國骨元來是家賊肉

【和訓】頌に曰く、晝夜一百八、終て復た始まる其の意察す可からず分明覩面同じく齒牙を聲らして擯出に逢ふ、好便宜を得たり江北の枳は江南の橘、地を換ふれば皆な然り侍郎此に到つて倍相疑ふ、鏡に對して影を怪し始めて知んぬ佛骨の擊てども摧け難きことを。將に謂へり他國の骨と、元來是れ家賊の肉

【頌】『昔夜一百八』先づ問題の骨子を捉へて來て最初に置いた、「糸つて復始まる」評唱の處でもう充分かと思つたら又同じ樣なことを持ち出した、『其意察すべからず』思量分別では却々大顚の眞意を推し測ることが出來ぬ、「分明覿面」イヤ〳〵その樣に難しいものではない、面前背後露堂々である、『同じく齒牙を聲して擯出に逢ふ』同じ樣に齒を叩くこと三下したのであるけれども首座は棒を喰つて趕ひ出された、同中に異あり異中に同あり、却々凡見常量では見分け難い處である、「好便宜を得たり」擯出されて始めて目が覺めたであらう、誠に好都合である、『江北の枳は是れ江南の橘』大顚の叩齒三下は是、首座のそれは不是、彼にありて善なるもの必しも之に在りて善ならず、處變れば品變る、浪花の蘆は伊勢の檜荻ぢや、「地を換れば皆然り」何でも處の變ると名が違ふ、されば言葉は國の手形ともいふではないか、『侍郎此に到つて倍相疑ふ』韓侍郎は斯樣なことになると一層疑を增して如何とせすることが出來ぬ、「鏡に對しては影を怪しむ」、疑の目を以つて見れば一切萬事疑問ならざるは無い、『始めて知んぬ佛骨の擊てども摧け難きことを』茲に至つて流石佛敎嫌の韓退之も佛骨の到底摧き難いことを知つたであらう、佛骨は實に韓退之をして佛門に歸入せしめた所の機緣であつた、擊てども摧け難き佛骨を『擊つて始めて祖師西來の意旨を會することが出來るのである、「將に謂へり他國の骨と、元來是れ家賊の肉」佛骨といへば印度〻の骨かと思つたら我が家の財寶を掠むる賊の肉であつた、自己本具の貴重なる好肉であつた。

第一百則　溈山方丈の話

溈山祐禪師方丈頌曰、溈山方丈甚時建立峭峻難上踢倒如地也若人蹈著勿誤下足氣如楚將奈勝夫眼何雲峰悅禪師曰、作家宗師天然有在賊僧問曰、和尚作麼生好箇一拶因有頌示曰、翠巖方丈見籠打籠曾無遮障却是難上衲子入來劍刃上便見和尚氷梁上僧禮拜而起見這什麼道理悅曰、郤見翠巖這箇老漢麼將謂無遮障○僧擬議果然不能入悅以拂子驀口摑豁開戶牖也了鐵網重重也○養子緣

【和訓】溈山の祐禪師方丈の頌に曰く、溈山の方丈甚の時か建立す峭峻にして上り難し、踢倒すれば地の如し若し人蹈着せば、誤つて足を下すこと勿れ氣楚將の如し、勝夫の眼を奈何せん雲峰の悅禪師曰く、作家の宗師天然の在る有り、賊賊僧問うて曰く、和尚作麼生好箇の一拶因みに頌有り示して曰く、翠巖の方丈籠を見て打す曾つ遮障なし、却つて是れ難上の衲子入り來つて、劍刃上便ち和尚を見る、氷梁上僧禮拜して起つ、這の什麼の道理を見る悅曰く、郤つ翠巖這箇の老漢を見るや、將に謂へり遮障なしと、しかるに鐵網重重なること能はず悅、拂子を以つて驀口に摑つ。戶牖を豁開し了れり○養子の緣議す、果然として入ること能はず悅、拂子を以つて驀口に摑つ。

【本則】『溈山の祐禪師、方丈の頌に曰く、溈山の方丈』『峭峻にして上り難し』溈山の靈祐和尚の傳は第七十四則に述べてある筈ぢや、百丈懷海の法嗣で溈仰宗の始祖である、其溈山和尚の方丈の額に頌が書いてあつて、此の則は其の語に就いての商量である、方丈は住持の居る室のことであるが、これは昔唐の王玄策といふ人が印度へ行つて維摩居士の遺蹟を訪ひ、其の居室の廣さを笏で測つて見ると十笏四方あつた處から、支那では一山一家の主人の居室を十笏四方に造ること、なつたといふことぢや、溈山の方丈は峭峻嶮岨で小見小智のものでは到底入ることが出來ぬ、佛見や法見に執はれて妄想分別をして居る輩の上り得る處では無い、「甚の時か建立す」其の樣な方丈は何時建てられたか、父母未生已前か、久遠か今時か、時間を超越したものであるから年代記を繰つて見てもそれは分らぬ、「踢倒すれば地の如し」峭峻上り難しといふけれども躍り上つて見れば別に變つた樣子もない、平地に立つが如しである、『若し人蹈著すれば』『氣楚將の如くならん』風外老人はかくいはれたが、方丈の頌には若し參學の衲僧機緣熟して溈山の室に入れば、楚將項羽の如く衝天の意氣實

に天下に王たるが如くであらうとある、佛法の堂奥なる此の力丈に上れば主中の主となつて一切法の根元を握り締むることが出來るから三千世界のこと我が意のまゝである、「誤つて足を下すこと勿れ」踏著するは可いが踏みそこなつて鬼窟裏に墮ちてはならぬぞ、「胯夫の眼を奈何」韓信は胯をくぐつたが、其の時眼は烱々として淮陰少年の脚下を睨んで居つた、『雲峰の悅禪師曰く、作家の宗師天然在るあり』大愚守芝の法嗣雲峰文悅禪師が潙山の頌を評して、潙山和尚は作家の大宗師で天然に明眼を具して居られるから、其の室に掲けられた額の文字も學人をして自ら奮勵激發せしむる底の力があると讃揚せられた、「賊賊」甘いことをいうて天下人を欺かすまいぞと風外老人は一寸雲峰の語を抑へた、『僧問うて曰く、和尚作麼生』然らば老僧ならば何といふ句を上げられますかと問ふた「好箇の一摠」好いことを問ふた、此處で一槌子を打ち込んで置かねばならぬ處ぢや、『因に頌あり示して曰く、羣巖の方丈、會て遮障無し』雲峰和尚は頌を示された、羣巖の方丈は潙山とは反對で何の遮障も無いから極めて入り易い、坦々として長安の大道を行くが如しであると放行して見せられたのである、「籠を見て籠を打す」籠作りが籠を見本にする樣に雲峰は潙山の眞似をせられたナと揶揄した、「却つて是れ上り難し」遮障の無い處が却つて油斷がならぬ、放行の釣針に引掛つては

ならぬといふ警戒である、『衲子入り來つて』便ち和尚を見る』參學衲子門に入れば直ちに主人公に相見が出來る、至道無難、唯嫌揀擇である、「劍刃上」『氷梁上」實に危嶮千萬である、一歩を錯れば忽ち喪身失命であると注意する、『僧禮拜して起つ』僧は尊答を謝して起つた、「這の什麼の道理を會得したならば甚だ結構である、『悅曰か見る」何を聞いて尊答を謝したのか、眞に放行の的意を會得したのか、却つて翠巖這箇の老漢を見るや』玄に於いて文悅和尚は僧の脚下を點檢せられた、禮拜するは可いが翠巖の主人公に全く相見が出來たかといふ驗試問である、上り易い方丈が此の一句で忽ち寄つても付けぬ、壁立萬仞となつて終つた、「將に謂へり遮障無しと」「鐵網重重」遮障の無い大道かと思つたら何んの事だ鐵條網が十重二十重である、玄に於いて『僧擬議す』進退谷つた、向上とも向下とも、放行とも把住とも、足場の掛け所が無い斷崖に行き當つて終つたのであるが、恰悧の漢ならば玄で退身三歩する處であつたが此の僧未だ其の力が無かつたと見える、「果然として入る能はず」此の垣一重が鐵のぢや、『悅拂子を以つて驀口に摑つ』文悅和尚は玄に於いて僧の爲に轉身の一機を示した、見よ翠巖の主人公は此處に居るではないかと脚下照顧せしめた、難とか易とか內とか外とかいふ對待を一棒の下に打盡して佛祖屋裏の堂奧に上らしめたのである、「戶牖を豁開し了れり」遮障を取り拂つて盡法界見透しの大廣間にして終つた、これが「養子の緣」といふのである、兒の爲に醜を忘じて種々と手段を盡された親の慈悲は廣大無邊なものである。

玄樓曰、潙山方丈難見易入、翠巖方丈易見難入、蓮藏海亦有方丈在、廓落無內外、旣是無內外、汝等諸人畢竟作麼生入得 恁麼則下去

【和訓】 玄樓曰く、潙山の方丈は見難くして入り易く、翠巖の方丈は見易うして入り難し、蓮藏海も亦た方丈の在るあり、廓落として內外なし、旣に是れ內外なし、汝等諸人畢竟作麼生か入得せん。 恁麼ならば則ち下り去らん

【評唱】『潙山の方丈は見難して入り易し』潙山は峭嶒にして上り難いといふ額を掲げてあるが、障子一重の部屋の樣なもので、中は見えぬが這入るには造作もない、把住の方から見る時は一切諸法悉く影を隱して摸索し難いが、而かも一歩を轉ずれば其處に眞如實相が露堂々たる姿を現はす、

『翠巖の方丈は見易くして入り難し』然るに翠巖の方丈は遮障なしといふから見ることは容易であるが、而かも一歩其の中に踏み入れやうとすると壁立萬仞一歩も進むことは出來ぬ、潙山と翠巖と、それ〳〵家風があつて難易其の趣を異にして居る、『蓮藏海も亦方丈の在るあり』方丈は蓮藏海でもある、寺として方丈の無い處はなく、又寺ばかりではなく、人々箇々皆一室の方丈を所有して居るのである、然らば女樓和尚の方丈の樣子は如何といふに、『廓落として内外無し』カラリと限なく盡法界に行渉つた廣大無邊な方丈であるから内も無ければ外もない、十方通暢八面凡て向背の處無しである、『既に是れ内外無し汝等諸人者畢竟作麼生が入得せん』内外無しとすればどうして蓮藏海の室に入るか、内外が無ければ出入も無い筈である、迷悟が無ければ修行も證果も無い譯である、而かも歴代の祖師は皆發心修行菩提涅槃しばらくも間隙あることなしである、這般の道理何と會得したものであらうか、畢竟これ學人の實參親究に一仕する外はないと座下へ向つて問題を提出せられた、「恁麼ならば則ち下り去らん」女樓和尚の方丈は廓落として内外が無いといふことであるから入る譯にも行くまい、然らば拙僧は御免蒙つて下山致さう、方丈へも這入れぬ樣な叢林に暇潰しをして居るもつまらぬことだと巧に一轉路を開いた。

頌曰、懸崖猶有爲人路（不昧不落嶮中平）平地奚藏陷虎機（不落不昧平處嶮）各立家風（了殃及兒孫）凭望刹（欲利濟人末後郤作不唧噜）不妨餘烈到今輝（昧却了也○祖禰不了殃及兒孫）

【和訓】頌に曰く、懸崖猶ほ爲人の路有り（不昧不落嶮中平なり）平地奚ぞ藏す陷虎の機、（不落不昧平處嶮し）各家風を立して望刹に恁る。（人を利濟せんと欲して末後郤つて不唧噜と作る）妨けず餘烈今に到つて輝くことを。（昧却了也○祖禰了殃及兒孫に及ぶ。）

【頌】『懸崖猶ほ爲人の路あり』潙山の方丈は峭峻なる懸崖であるといふが而かも難中に易ありで、人天の爲に平坦な別路を開いて置かれて、「不昧不落嶮中平かなり」前百丈は不落因果といひ、後百丈は不昧因果といふ、種々と說く處に嶮中自然に平なる佛向上の道が示されて居る、『平地奚ぞ藏す陷虎の機』翠巖の方丈は遮障無しといふたが、平々坦々たる處にも虎を陷る、穽があるから油斷な出來ぬ、佛法の消理等といふものは案外造作ないものぢや等と片言隻語を聞き嚙つて得々として居るとそれが却つて邪路に導くものであるから大いに注意を要する、「不落不昧平處嶮し」因果歴然たる平地上にも因果に墮せざる絶對の嶮所あることを知らねばならぬ、『各家風を立し望刹に凭

る。』潙山は潙山、翠巖は翠巖、それぞれ一家の風規があつて、或は把定して學人を接し、或は放行して衆を導く等、種々異つた方丈を建てて爲人度生の職責を盡す、望利は大伽藍のこと、「人を利濟せんとして末後却つて不唧嚕と作る」不唧嚕は不怜悧、鈍重、不敏捷といふ意、衆生濟度の爲には怜悧峻發の作家も手ぬるい閑手段を弄して不怜悧の譏を敢て避けぬ、これ所謂徹悃の慈悲である、『妨げず餘烈今に到つて輝くことを』潙山和尚等の爲人度生せられた功勳の餘光が數百年後の今日尚ほ吾等の上に及んで、お蔭で開發悟道し得るものが頗る多い、盡未來際に至るまで限なく天下人をして本來の面目に相見せしむる仲介となることであらう、「昧却了也」サア我が座下の諸人者、立樓和尚が示された的意が分つたか、諸人者が會得をせぬと「祖禰了せずんば殃兒孫に及ぶ」子々孫々生死輪廻の火坑を脱することが出來ぬぞと警誡して全體の總結とせられた。

鐵笛倒吹講話下卷終

大正十年五月十日印刷
大正十年五月十五日發行

定價參圓

鐵笛倒吹講話　下卷

講述者　日置默仙
編者　池上文僊
發行者　增田義一　東京市京橋區南紺屋町十二番地
印刷者　渡邊八太郎　東京市牛込區榎町七番地
印刷所　日清印刷株式會社

發行所　東京市京橋區南紺屋町十二番地
實業之日本社
電話　京八七四、八七五、八七六、九八九、四九四三
郵便振替貯金口座　東京三二六番

□**碧巖錄講話** 上下 三版

前黃蘗派管長
高津柏樹老師講述
定價各三圓 郵稅各十二錢

參禪學道の初門として盛んに依用せらるゝもの。本書は原文に和訓を附し、更に垂示を添へ、兩々相俟つて居ながら此書を學ぶを得べし。

□**無門關講話** 再版

建長寺派管長
菅原時保師講述
定價 三圓 郵稅十錢

禪門の祖錄中比較的文字平明、理路整然たるもの。初心の參學者間に珍重せらる。菅原氏の懇切なる講話は更に一層之を平易ならしめたり。

□**錬膽術** 二十八版

前永平寺管長
日置默仙禪師講述
定價六十五錢 郵稅四錢

膽成る所、其處に大智略出て、大勇氣起り、大人格大威嚴備はり、有ゆる煩悶妄想を立處に一掃す。默仙禪師本書に於て錬膽の法を說くこと切なり。

□縮刷 **修養** 五版 七十

農法學博士
新渡戸稻造氏著
定價一圓五十錢 郵稅六錢

□縮刷 **世渡りの道** 三版 四十

農法學博士
新渡戸稻造氏著
定價一圓五十錢 郵稅六錢

□**一日一言** 二版 五十

農法學博士
新渡戸稻造氏著
定價八十錢 郵稅四錢

□**自警** 二版 第十

農法學博士
新渡戸稻造氏著
定價二圓 郵稅十六錢

□縮刷 **青年と修養** 六版 二十

實業之日本社長
增田義一著
定價一圓五十錢 郵稅六錢

□**大國民の根柢** 五版

實業之日本社長
增田義一著
定價一圓八十錢 郵稅十錢

□生活戰術 十版 法學博士 浮田和民氏著 定價一圓五十錢 郵稅六錢

□書畫骨董鑑賞と鑑定の仕方 三版 今泉雄作氏著 定價四圓 郵稅十八錢

□南畫新論 新刊 小室翠雲氏著 定價二圓五十錢 郵稅十錢

□風流の友茶道美談 再版 熊田葦城氏著 定價三圓 郵稅十錢

□名作物語 三版 加納幽閑子著 定價一圓四十錢 郵稅六錢

□小唄傳說集 再版 藤澤衛彥氏著 定價一圓八十錢 郵稅六錢

□戲曲修訂法難 七版 文學博士 坪內逍遙氏著 定價貳圓卅錢 郵稅八錢

□隨筆それからそれ 四版 文學博士 坪內逍遙氏著 定價一圓八十錢 郵稅八錢

□日蓮上人聖地巡禮 三版 一高澗洽會編 定價一圓五十錢 郵稅八錢

□縮刷社會と自分 二十一版 夏目漱石氏著 定價一圓五十錢 郵稅六錢

□祖國を顧みて 第十四版 法學博士 河上肇氏著 定價一圓廿錢 郵稅八錢

□海洋文學海へ 九版 島崎藤村氏著 定價一圓卅錢 郵稅十錢

□新しい主義學說の字引　第十二版
勝屋英造氏編　定價三圓　郵稅八錢

□改訂增補　新しい言葉の字引　四十六版
服部嘉香氏　植原路郎氏共編　定價一圓　郵稅四錢

□常識教科書　知らぬと耻　第十八版
樋口麗陽氏著　定價一圓　郵稅四錢

□一般性慾學　第十三版
醫學博士　羽太鋭治氏著　定價二圓八十錢　郵稅十二錢

□性慾と近代思潮　四版
醫學博士　羽太鋭治氏著　定價二圓　郵稅六錢

□性慾研究と精神分析學　第十六版
醫學博士　榊保三郎氏著　定價二圓　郵稅十二錢

392
146

終